

臭くて黒っぽい肝油を服用させられた
思い出がある方も多いと思います。

では、研究論文の内容を見ることに
しましょう。この研究は米国疾病対策
センター（CDC）が収集した米国保
険栄養調査の五千九百二十人分のデー
タを利用して、日よけとビタミンDの
血液中濃度について解析されておりま
す。

米国白人で屋内で生活の大半を過ご
している方、外出時に帽子、長袖の
シャツ、サングラス、手袋等で日よけ
予防していた米国白人グループと、日
焼けを気にしないで過ごした米国白人
グループの血液中のビタミンD濃度が
検討されておりまず。

その結果、外出を避け屋内で過ごす
時間が長い米国白人グループの血液中
ビタミンD濃度は二十二・八ナノグラ
ムパーミリリットルでした。

これにたいして日焼け予防対策しな
かった白人グループでは二十七・八ナ
ノグラムパーミリリットルと有意に日
焼け予防グループの方がビタミンD濃

度は低いことが分かりました。

したがって、日焼け防止策は日光が
皮膚に到達しにくいため皮膚での日光
によるビタミンDの合成が低下し血中
ビタミンD濃度の低下を招いたと考え
られます。

ところで、日焼け止めクリーム等（サ
ンスクリーン）を使用した白人グルー
プとサンスクリーンを使用しなかった
白人グループでの結果がどうだったの
でしょうか。サンスクリーンの効果が
どのようにでたのか興味があるところ
です。

結果はサンスクリーンの使用の有無
では、今回の調査では血液中ビタミン
D濃度には有意な影響は認められな
かったようです。

この点については研究に携わった研
究者達はこのデータに首をかしげてお
り、その原因は不明としております。
しかしながら、サンスクリーンが皮膚
を十分に覆っていなかったのではない
かとコメントしております。

サンスクリーン以外の方法で屋内で

長く過ごしたり、サンシェード付きの
衣類で日よけ予防を行なっている米国
白人ではビタミンDの血中濃度の低下
が明らかになりました。

したがって、ビタミンDの低下を防
ぐためビタミンDを多く含む食品など
で補給することをその対策として考え
られております。ただし、安易な健康
食品の利用は勧めておりません。今後、
異なった面からサンシェードとビタミ
ンD不足の対策の検討がなされていく
と思われまます。

白人以外の米国人については日よけ
による血液中ビタミンDの影響はほと
んど認められなかったようです。

今後、日本人をはじめアジア人につ
いても検討が必要かと思われまます。

古老が話すように日焼け予防も血液
中のビタミンD低下の対策が講じられ
るまで腹八分目程度にするのが得策か
と考えております。

来年の日焼け予防は幾分緩和しま
しょう。

たまあじさい

中西美子



女流作家の方からたまあじさいの写真を送って頂きました。

嫌というくらいに梅雨時になると紫陽花を目にするのにたまあじさいは、見たことがありませんでした。梅雨時ではなく秋に咲くというから二度びっくりしました。

この夏、ようやく玉紫陽花という白い花の鉢物を花屋でみつけましたが白い花のせいかわ刺激的には、感じませんでした。頂いた写真は、玉の中に紫色やピンク色が透けて見えるのがよくて、また咲きかけるときのこぼれそうな花が可愛くていいのです。

余裕ができたら秋の鎌倉でも歩いてみようかなと思います。

詩人の凄さ、見事さ — 右近 稜と麻生直子のこと —



志^し
村^{むら}
有^{くに}
弘^{ひろ}

(文芸評論家・
相模女子大学名誉教授)

作家の西野辰吉は、北海道の深川に六歳のとき初山別から移り住んできた。深川の町中に石狩川が流れており、旭川を背にすると、西野は石狩川の右側の町（音江）に住んでいた。私は左側の町（太子町）で生まれた。いつでも、西野と私とでは深川に住んでいた時期は異なる。だが、深川が縁で、後に私は西野と一緒にしばしば酒を飲んだりしていた。西野は小説『秩父困民党』で毎日出版文化賞を受賞している。

詩人の右近稜は音江に生まれた。私

は右近とも、やはり深川が縁で親しく交流している。深川は農作物が豊かで、自然も美しい。北原白秋や斎藤茂吉も深川を訪れている。右近は、承久の変のおり、佐渡に配流された順徳天皇に随行した人の子孫であるという。右近はこれまで詩集『カマキリのタクト』・『梢』・『ぼんぼん時計』などを出し、『右近稜著作集』全四巻をノア出版から刊行した。右近の詩の特色は、一つ一つの詩が物語を造りあげている点にある。

右近の従兄宮田勇治は、昭和十九年

(一九四四)十月、ジャワ海域で戦死した。その公報は昭和二十年になって家族に届けられ、ひと掬いの砂が入った木箱が届けられてきた。それから二十年を経て、フロレス海に浮かぶ南の小島で日本兵らしい遺体（遺骨）が発見されると新聞で報じられた。その遺骨は軍靴をはいており、遺骨についての問い合わせが殺到したという。

遺骨は軍靴をはいていた？／月の方を向いて寝ていた

遺骨は鉾その重たい靴を／二十

年間脱がして貰えなかった／服も
脚絆も帽子も

肉ささとうに脱いでしまったのに
遺骨はこの島で／自分の年よりも
長い時間波の音を聴いていた／反
りかえった靴から蚊が飛び立った

この詩は、昭和五十九年（一九八四）、
右近が「波の音」と題して、二十年後
に発見された日本兵の遺体に思いを馳
せて綴ったものだ。この詩を読んだ今
川徳三（歴史小説家）が「詩人とい
うのは、たいしたものだね」と舌を巻い
ていたのを記憶する。詩人の言葉を選
び抜いた表現力に驚嘆したのだ。

詩人麻生直子は、詩誌「潮流詩派」
の発行・編集人をしている。これまで
『霧と少年』『神威岬』『足形のレリー
フ』などの詩集を出し、評論『現代女
性詩人論』も出している。『足形のレ
リーフ』は、第四十回日本詩人クラブ
賞を受賞した。

麻生の祖母は出奔した夫の行方を尋
ねて、東京の網島から麻生の母を連れ

て北海道の奥尻島へ渡った。そうして
歳月が流れ、直子が誕生した。麻生は、
柳田國男の世界やアイヌ詩人に関心を
寄せている。アイヌ文様刺繍のチカッ
プ美恵子（詩人）に深い愛情を抱き、
美恵子の母伊賀ふでの詩集『アイヌ・
母の歌』（現代書館）を刊行したりする。
一九九三年夏、奥尻島は地震、山崩れ、
津波に襲われた。

憶えていてください／青い潮風の
海辺の町で／すこやかな心とから
だをもった人びとが／ていねいに
生きていた一日一日を

一瞬の大地の鳴動が／破壊しつく
したあの夜の津波の怖ろしさ／連
れ去られた家族たち／かなしいそ
の光景に失意して／未来を拒んだ
りしないでください

あなたの一日一日を／このままで
は終わらせないでください／はる
かな海の／月夜の眠りに還って
いった人びとのために

最初の人板切れとともにこの磯

に立ち／銀色の魚を釣り／野菜や
穀物を育て／ひと組の男女が結ば
れ／父となり母となり／ながい寒
さから幼な子をまもり／働くこと
をいとわずに築いてきた村や町／
くらしの糧をわけあつてきた／海
辺の家族の／その歳月を置き捨て
ずにいてください

生き残った人びとの／心に移り住
んでいく魂たちの祈り／無数の人
びとの温かな声援／憶えていてく
ださいあなたも

詩人麻生直子の慟哭が行間に滲み出
る。被災者への心からの祈りとエール。
読んで流れる涙。この詩の碑（麻生直
子筆）が、奥尻島の海洋記念緑地公園
内に建てられた。

右近稜と麻生直子。ふたりの詩人の
真摯さと見事な表現力を讀みたい。私
は彼等と故郷を同じくすることを誇り
に思う。



現在「貼り」の伝統工芸士は二人。
その一人長戸幸夫さん。

発祥の地ではなくとも知恵を働かせ時代に沿って変容すること、丸亀うちわは全国90%のシェアを誇る産業となった。

全てが丸亀うちわだ。

丸亀うちわには三つの起源があるといわれている。金毘羅の別当・金光院住職の宥暎が金毘羅参りの土産物として考案した男竹丸柄の渋うちわ。江戸中期、丸亀京極藩江戸屋敷のとなり豊前中津藩の藩士から技術を習い、藩士の内職として奨励し、後に国元のうちわ産業界の礎となった女竹丸柄うちわ。量産を目的として取り入れられた奈良の平柄うちわ。

丸亀うちわ

香川に伝わる伝統的工芸品



左:まるこんうちわ
右:三豊市の蔵から出た江戸時代のうちわ。100年以上のもの。



長戸さんはうちわ屋の三代目親方。昭和30年代、うちわは生活必需品で、お店の中元といえぼうちわだったと言う。その頃はうちわ屋も一年中忙しかったが、ポリうちわの開発や機械化、うちわをとりまく社会環境の変化などにより、うちわ産業も大きく変わり、機械貼りが主流となった。

平成9年、丸亀うちわが国の伝統的工芸品の指定を受けたのを機に、後継者育成事業がはじまり、竹を割り、穂を糸で編み、地紙を貼ってうちわを仕上げられる人たちが育成。



「たたき」うちわの種類に応じ型で穂を切る。
この型は三代前から使い続けている。



「貼り」うちわ骨の穂にのりをつけ地紙を貼る。

修了生のうち3人は職人に、
ほか20名も何らかの形でうち
わ製造に携わっている。



風布に使う草木染の材料の中には、草木を育てるところから始める徹底ぶり。



丸亀うちわは多種多様だ。



うちわの港ミュージアムの実演コーナーでは伝統の技が間近で見られる。

風布

夫婦で作った「風布」の風は、丸く優しい。

骨が交差する立体的な丸柄は平柄以上に貼りが難しい。まして、やり直しがきかない布うちわの「貼り」は、まるで子どもを育てるように「一本一本こころを込めてつくらないとうまくいかない。その丁寧な仕事」が10年たっても歪みのない布うちわ「風布」を生む。

「これは、家内がうちの職人ではなかったから生まれたのだと思う」と長戸さん。効率だけを考えたなら、こんな手間のかかる仕事はしない。けれど、その手間暇かけた仕事を作る風布の優しい風は人から人に伝わり、生産が間に合わない人気となった。



この思想は難かしい



志村栄守
(評論家)

テレビが高齢者の独居生活、その先に待つ孤独死の問題をまた取り上げていた。

今回は、識者とされる人に加えて、メールで届く多方面の人の意見を窺うことができ、この時代の人の心模様、少くともその一端くらいは垣間見た気がした。

その印象は、人間の善意が出口を求めているかのようで、まことに結構なこと、一見、非の打ち所が無いように見える。しかし、制度上の整備とか奉仕活動、いわば外側から手を差しのべることに、人間の善のすべてがあるような、そんなやりとりが大いに気になった。テレビではこうならざるを得

ないことは承知しつつも、何か不自然を得る。

古い表現でマニアとかフリーク、流行の言い方では「オタク」というそうだが、小林秀雄に対してこれを自認する者からすると、この時代、人間からある発想に対しての直感とか直覚が著しく消失しつつあると見えてならない。

そんなことを思っていたら、時を移さず、こちらは民放だったが、画僧・雪舟をやっていた。『慧可断臂図』、小林は自らの全集の七ページ程の『雪舟』を書くに当って、この絵で書き始め、エンディングもこれに触れて閉じている。

『山水長卷』その他を差し置いて、なぜ？かと言えば、話は単純でもある。小林はこの絵に、自身の思想がほとんどそのまま構図されているのを見て、数世紀も時間を遡行した先人に大いに心動かされ、孤独な感動を心ゆくまで味道しているのだ、と言えと思う。

「嘗て上海の銭さんの許で、顔輝筆『慧可断臂図』といふものを見せてもらった事がある」と小林はまず書いてから、以下のように続ける。

「恐らく雪舟は、この種のものに倣って作画したのであるうと思はれたが、模倣によつて如何に異つた精神が現れるかには驚くべきものがあつた。」

周知のように、絵の内容はこうだ。「達磨(大使)は石屋の様に坐つて考へてゐる、慧可は石屋の弟子の様に、鑿を持つて待つてゐる。あとは岩(これは洞窟でさへない)があるだけだ。この思想は難かしい。この驚くほど素朴な天地開闢説の思想は難かしい。込み入つてゐるから難かしいのではな

い。私達を訪れるかと思へば、忽ち消え去る思想だからである。雪舟の思想は、もはや私達から遠いところにあるか。決してそんな事はないと思ふ。」

雑誌とか全集の口絵と違って、テレビで目の当りにナレーションとともに目撃すると、迫真の度合いが全然、違って感得できた。

「たつた今切った自分の腕(臂)を、外れた人形の腕でも拾った様な顔で持っている男、これは伝説であらうか。ところが絵は全く逆の事を言ふ。」

サデイスティックとも見える事象をコトも無げに綴るこの辺りは簡潔であるのに、盛られた内容の濃さが際立つ。こんな風には読めないか。

まず、一部が巨眼のようでもある岩壁が超人間的存在の象徴として見えること、二つめは達磨の姿が淡い描線であたかもひと筆で描かれたかのようで、且つ、ほとんど彩色がほどこされていないと見えること、さらには「この思想は難かしい」とまで書いたうえ、慧可が自らの腕を断じて、これを達磨

に差し出し弟子入りを懇願していること、これらがどうしても自らの思想の先駆と読めて、その感動がマックスにあると思われることだ。

ところでここに、下世話な一つの疑問が生じないか。小林はなぜ、その感じたままを書かなかったのか、と。このこともまた、この人の思想の要諦ときちんと整合してもいるから、少々、厄介なことになる。

「何処どこを見ても人間を教へようとする書物ばかりが氾濫してゐる現代に、『ルナルの日記』を歓迎するのは、一般読者のさういふ直覚による智慧なのだ。」(小林『ルナルの日記』)

世の中の当り前の良識からしたら「人間を教へようとする」行為は、一点の曇りもない美名であろう。ところが、小林においてはそうでもない。ここにも見え難いこの人の思想の真骨頂の一つがある。

もつともこの逆説も、慧可のように自らの臂を断じてまで達磨に弟子入りを懇願するという、言うなれば超絶行

為が暗示する逆説の前では影が薄いかのようにではある。

ところがその後者の本意も、実は意外にも、私達の日常生活に明滅しているかも知れないのだ。「もはや遠くにあるか。決してそんな事はない」と書く通りなのではあるまいか。

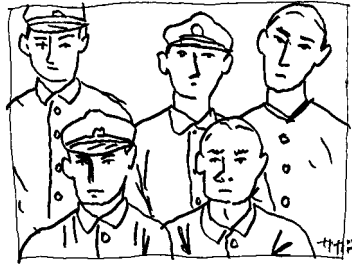
ちなみに小林は、ベルクソンから得たと思われるが「直接経験の世界」という言葉を使う。(『私の人生観』)あたかも自分の思想の扉を開く鍵はここにある、と言わんばかりに。

このことを同時に勘案すると、『慧可断臂図』をなぜ、小林が好み、重要視するか、心の内が読める気がして来ないか。

「僕はこの単純な問ひから直ちに一見異様な結論が飛び出して来るのになら驚いてゐるのだ。現実の生活にもオリジナルなもの入り込む余地はないのだ。」

これは『青年』について』に出て来るパラドックスだ。(『青年』は林房雄の小説)。

写真



佐川毅彦

母が長い箱に入るまで待つしかない。父は必要のない物、同じ物、なんでもかんでも通販で買っていた。九十年間ためた衣類もたくさんある。カビた百科事典も全巻そろっている。小学校の校長をしていたので教育関係の本もある。だれも欲しがらんで束にしてゴミとして出すしかない。

父が他界した。生前は父のわがままに家族はかなり振り回されてきた。亡くなった時、悲しみはなかった。妹弟は財産相続でうるさい。

家の中は父が自分勝手に改造したのものですごく使いづらくなっている。再びリフォームが必要だが、認知症の母の猛反対でうまくいかん。

捨てる物がいっぱいある。大きな椅子型のあんま機、はがれた皮ばりの座椅子、プロ用のルームランナー、ぶらさがり健康機その他たくさん。庭の松などの樹木は定期的に剪定しなければならん。

ひと月ほっとくと雑草がかなりはびこり大変な事になる。いい加減にせんとかんと私の絵を描く時間がなくなる。

とにかく少しづつでも整理しなければならん。服などだれも着ないのぞうきんにできん物はすべて捨てる。物を捨てるのは爽快である。気分がすっきりする。できる事なら母も捨てたいのだが。

しかしこの家はあまり掃除していない。押入れの中はワタほこりや丸めた紙クズ、スーパールのチラシ、ヤモリのフンでかなり汚れている。いろんな物が詰め込まれている。はき古した運動靴がでてきた。トイレによくある板のサンダルもある。

それらの中から写真の束がでてきた。ほとんどが四十年代以後の父だつた。その中の一枚に学生が五人写っているのがあり、右端に坊主頭の若者がいる。父だと思った。それを見つめているとなんかしらは涙がでてきて、泣けて泣けてどうしようもなかった。

恨むなら地球温暖化



桐原良光

(文芸ジャーナリスト)

夏の通販の広告で面白いのは、「照り返しも防いで、顔ぜんぶ日焼けさせない！」などと謳う鏝広の帽子だ。そこには首の後ろ側や顎までカバーできるフードと着脱可能・跳ね上げ自在のサンングラスまでセットされて「帽子／UVカット率約九十九%」「サンングラス部／UVカット率約九十九%」などとも記されている。つまり、首から上の露出部分を完全にカバーしてしまおうという商品。何もそこまで…とも思うが売れるのであろう。

日差しが強くなってくるとよく出くわすのが、巨大なフルフェイスの深々としたサンバイザーで走る自転車の女性だ。顔のほとんどが覆われている異様な姿だから、美しいのかさうでないのかは全く窺い知ることはできない。自転車は、そろそろという感じて走っていることが多いから、多分、お若くはないのであろうとご推察申し上げるしかない。

街中では、パラソルを差した女性が目立つ。パラソルというとは前は、白

か薄いベージュのものが多かったが、最近では黒系が圧倒的。これを深々と差して向かって来るから危なくて仕方がない。これは雨傘でも同様だが、向こうからやってくる相手を見ながら傘をお互いに躲し合うなんてことが少なくなっているから、深々と差されたパラソルの骨の先端は、真つすぐにこちらの眼前に迫ってくる。瞬間、身体を傾けて躲すか、止むなく手で払わなければならぬ。最近では、ケイタイを操作しながら全くこちらを見ずに向かってくるヤカラもいて、どっちへ進んでくるのかまるで予測できないから危険極まりない。パラソルを差すこと自体は、猛暑の街中、当然のことかも知れないが、このままでは、パラソルが原因の「パラソル殺人事件」など起こらないかといらぬ心配をすることになる。

関西では、女子高校生までが登下校にパラソルを使用するようになってきたとか、男性にも日傘ブームといった最近の新聞報道もあったから、今後、日本パラソルはますます普及していく

ことになるのだろうか。これがパラソルの本場、ヨーロッパなどではまずお目に掛らないから不思議だ。もつともパラソルを差しそうな上流階級が闊歩しているような所へはこちらが出向いていないのだから、「ヨーロッパなどでは」と言い方はフソンかもしれない。筆者などが出沒する観光地などでは、欧米人がパラソルを全く差していないのに日本人観光客だけが差しているという異様な光景となる。そしてその日本人観光客は、日本の習慣そのままに深々と差して、ロクに前も見ずに雑踏の中を突進するから、背の高い欧米人の眼前に骨の先端が向けられることになる。ヒヤヒヤものだが、ツアーの仲間であっても名も知らないご婦人というぐらいでは注意することもできない。

ご存知のようにヨーロッパ人は、太陽好きだ。特に冬場、太陽の出ている時間が極端に少なくなる地域の人々は、夏が近づくに競って長いバカンスを取り、一斉に南を目指す。そして男

も女も一年分の太陽を吸収するぐらいの思いで存分に肌を焼く。そうではないと「バカンスも取れないような仕事をしているのか」と蔑みの眼で見られることもあるらしい。だから男はもちろん、相当なおばちゃんたちも大きな胸や太い腕を露出させて歩いている。おばちゃん達は、胸や首・肩がシミだらけだつて一向に構わない。若い女性達もベビーカーを押すママたちも太陽大好きだ。パラソルで折角の太陽を遮るなんていうモツタイナイことはしない。日本人がこれほど日焼けを気にするようになったのは何時ごろからだろうか。江戸時代から紙を張った日傘はあつたし、明治になってからは舶来のパラソルも流行り出した。パラソルを女性たちの絹や紗の羅姿（ろまの）にも合うようにした知恵者もいたのである。戦後も復興してからは、割と早くから夏の東京・銀座などでは着飾った女性たちが必ず白っぽいパラソルを手を歩いてきたようだ。しかし若いOLまでがパラソルを差していたという記憶は筆者

にはない。パラソルを差した時には、雨傘同様、近づいた者同士、必ず躲し合うマナーがあつた。近年になって、猛暑、紫外線有害論とUVカット、透明美人……といったことで日本独自のブームとなり、パラソルも女性たちの必需品になったのであろう。テレビのCMでもやっていた夏定番の、あの小麦色の肌をした美人たちはどこへ行つてしまったのだろうか。

ほとんどのイスラム社会の女性たちは、ブブカというベールで顔も目も覆っていることもご承知の通りだ。もちろん肌を他人に見せてはならないという宗教上の理由からだが、太陽光線の強烈な国、また砂嵐も起こるといったことも理由にあるのだろうか。フランスでは、ブブカ排除論もまる喧しいが、相手の視線も表情も全く分からな（かまひび）いというのは、確かに不気味なものだ。宗教上の理由ならともかく、この日本で完全夏装備の覆面姿はいかにも不気味で、あまりお目に掛かりたくはない。恨むなら地球温暖化を、か。

床屋ですか美容院ですか



片岡義男

(作家)

三十五歳の夏の午後、僕は世田谷の下北沢という場所の南口商店街を、駅に向けて歩いていった。駅に向かうときには、この商店街の道はゆるやかな登り坂となる。この坂のちょうどまんなかあたり、駅に向かつて左側、確か道に沿った小ぶりの雑居ビルディングの二階に、小さな看板の屋号にカット・ハウスという言葉が添えた、床屋とも美容院ともつかない店があった。客は男性を想定していることが、その看板を見れば誰の目にも明らかだったが、それがなにかだったかは、忘れてしまっ

その看板を目にとめた僕は、髪を切りに髪を切る店ではないか。僕は二階へ上がりその店に入った。従来どおりの床屋ではないけれど、男性の頭髪を客の希望に可能なかぎり沿って整える、という方針の店だった。僕は髪ゼンたいをまんべんなく五センチほどの長さに切ってもらった。それまではかなり長かったから、店から商店街へ出て来たときには爽快な気分だった。そしてこのとき以来、僕は床屋にも美容院にもいっていかない。このときは、幾年月としか言えないような年月の彼方だ。

高校生の頃には自分で髪を切っていた。それが面白かったからだ。下北沢のすぐ近くにあった僕の自宅の三軒隣が美容院だった。そこで働いている、当時の僕とおなじような年齢の女性と、近くの蕎麦屋で偶然にいつしよになったとき、おなじテーブルで彼女は「おかめうどんを、そして僕はきつね蕎麦を食べた。食べながら彼女は、「ヨシオちゃん、そのリーゼントの髪を自分で切ってるでしょう。じよきん、と切れるわよ。揃えるだけでもやってあげるから店へ来てよ」と言った。僕は彼女と渋谷でデートはしたけれど、彼女が働く美容院で髪をきれいに切り

揃えてもらうことは、しないままだった。

下北沢のカット・ハウスから十年ほどあと、四十代なかばとなっていたあの日の僕は、中央線の快速で東京駅へ向かっていた。電車は空いていた。僕はひとり座席にすわってぼんやりしていた。隣にすわっていた、僕とほぼおなじ年齢と推定出切る男性が、いきなり僕に次のように言った。「その髪は自分で切つてるでしよう。じよきん、と切れますよ」人好きのする笑顔で僕に向けて彼は名刺を差し出して、言葉を重ねた。「神田で美容院をやつてるんですよ。〇し相手に早くて安くて、上手な美容院。男の床屋もやつて、料金は千円の均一で仕事は早いです、あつと言う間に終わります」

快速電車は神田駅に入つていった。その男性は笑顔で電車を降りた。気持ちは多少は動いたが、僕が彼の店へ行って髪を切つてもらうことは、ついになかった。いまでも神田に店があるのだろうか。早くて安い床屋、あるい

は美容院、というものへの需要が、世のなかに生まれ始めた頃だった。高校生の頃から髪は自分で切つていた僕は、四十代なかばでは完全に、床屋とも美容院とも縁のない人になりきっていた。

だからいまでも髪は自分で切つている。やや長めの髪を、リーゼントと呼ぶならそうも呼べるようなかたちにするのだが、理由はこれと言つてなにもない。そうするのがすっかり癖になっている、とでも言えはいいか。

そしてこの夏、僕はその癖をやめることにした。やや長めの髪をリーゼントふうにまとめるのが自分と思ひ込んできたけれど、短くするとそのほうがはるかに自分なのだ、ということを僕は発見した。だから髪は平均して長さ四センチほどに、自分で切つた。その髪とともに、きわめて快適に、僕は猛暑の夏を過ごしている。

髪を短く切るほんの少し前、北国でオートバイに乗り美容院を経営している女性が、僕の親しい友人のいつもは

東京にいる女性に、「カタオカさんの髪は床屋で切るのかしら、それとも美容院かしら。機会があったら訊いて」と言つたと、東京にいるその女性が僕に伝えた。

美容院を経営している髪のプロにとつては、僕の髪は、床屋さもなければ美容院という、二者択一の問題だった。自分で切る、という選択肢を加えて、三者択一の問題としてとらえることは出来なかつたようだ。「もう何十年も自分で切つていると伝えてくれ」と、僕は答えておいた。

美容師のその女性とは今年の夏の初めに東京で会つた。来年の前半までにはまた会う機会があるだろう。そしてそのとき彼女は、僕の髪をプロフェツショナルな視線で観察するに違いない。髪はそのときも短いままであるはずだから、じよきんと切れている部分は目立つだろう。じよきん、という擬態音の三度目を、ぜひ彼女から聞きたい。

矛盾考



フジテレビ系列のテレビ放送に「ほこ×たて」という番組があります。

内容は、相対立する最高レベルの技術で製造された製品が対抗するもので、例えば「铸造されたどんなものでもぶっ壊す鉄球」と「絶対に破壊されない世界一頑丈なバリケード」の対決といったもので、クレーンで吊り上げた高さ五トンの鉄球を、直径三十七センチ、高さ九十センチ（地中には二メートル埋められている）の車の進入を防ぐために開発されたバリケードにぶつけて、二時間以内にバリケードが壊れ

たら鉄球の勝ち、壊れなければバリケードの勝ちといったものであります。

その放送の中に「どんな金属にも穴を開けることができるドリル」と「絶対に穴の開かない金属」の対決というのがあって、実際にスタジオにおいて超微粒ドリルでもって超硬合金の金属に穴をあけることができるのか対決したものがありました。その結果は、金属を一ミリ位削ったところで、ドリルの超微粒が割れてしまい一応、引き分けということになりました。（私には、ドリルの負けと思われましたが。）

山西靖彦

真に「矛盾」の物語を実際にスタジオで行ったようなものであります。「矛盾」の話は中学校の教科書にもでており、よく知られた話ですがつぎのようなものであります。

「楚人に楯と矛とを鬻ぐ者有り、之を誉めて曰く、「吾が楯の堅きこと、よく陥す莫きなり」と。又其の矛を誉めて曰く、「吾が矛の利きこと、物に於いて陥さざる無きなり」と。或るひと曰く、「子の矛を以て、子の楯を陥さば如何」と。其の人、応ふる能はざ

るなり (韓非子 難一)

「楯」も「盾」も「たて」で矢や槍などから身を守る武器であります。「ほこ」には、「鋒」「戈」「戛」「戟」などの種類があり「矛」は枝刃のない笹の葉形のほこ先に長い柄の付いた突き刺す武器であります。

テレビ番組の「ほこ×たて」の方は、ドリルのメーカーと超硬合金の金属のメーカーとがそれぞれ異なり、互いに技術の粋を傾けた商品で対決するのでありますが、一方の楚人の方は、自分の矛と楯をほめていうのだから、「お前の矛でお前の楯を突き通してみればどうなるか」と、言われれば、さすがの楚の商人も「自己撞着」に陥ったといわざるを得ません。

ところで、この商人はなぜ楚人なのであろうか。また、この「盾」と「矛」の材質は果たして何であったのでしょうか。

楚という国は、周初の時代には荊蛮又は楚蛮の地といわれ、周の成王が岐

陽(陝西省)に諸侯を招集して会盟したときには、楚子の熊繇は会場の燎(かがり火)を守るという屈辱的な役目をさせられています。

その楚が春秋時代には、春秋五覇の一人とされる荘王が周の大夫に、歴代の王朝から周に伝えられている「九鼎」の重さを問うたという有名な「鼎の軽重を問う」の故事があるように、周を凌ぐほどの強盛な国家に成長するのであります。

それは楚の人々が勇敢で誇り高い資質を持つとともに、楚の版図である汝水と漢水の一部が砂金の産地であったことが大きな理由だといわれています。その砂金を溶かして黄金にする過程で、その中に含まれる砂鉄を鋼鉄にする技術が楚によって開発されたのです。

春秋時代の鉄は劣悪で、品質は青銅に劣り、青銅は「良金」と呼ばれ武器に利用されますが、鉄は「悪金」と呼ばれ武器には用いられませんでした。その鉄を良質のハガネにする技術を楚

は発見したのです。

「史記」の「范雎伝」には、秦の昭王が「楚の鉄劍は利にして、倡優は拙し」といつて楚を怖れた話があり、楚の鉄製の劍が鋭利であることと、俳優の芸が下手である(演芸を楽しむよりも、質実剛健を求める国民性である)ことを怖れるものです。

それほど楚の製鉄の技術は優れていたのです。ですから「韓非子」に登場する楚の商人が売っていたのはともに鋼鉄製の矛と盾であったと思われる。楚の商人たちは諸国を回ってその優れた鋼鉄製の様々な武器を売り歩いていたのでないかと思えます。

ですから楚の商人が、その鋼鉄製の盾を売るにあたっては「いかなる青銅製の矛もおすことはできない」といい、また、その鋼鉄製の矛を売るにあたっては「どのような青銅製の盾もおすことができる」といつておれば、「自己撞着」に陥ることは無かったのであります。

みちのくの祭り「鹿踊り」

さかもと ふ さ

(型絵染版画家、エディター
イラストレーター)



十一月の個展のための資料集めに六月に宮城県栗原で行われるみちのく鹿踊り大会の祭りを見に行った。

震災から一年たった、山側の栗原の畑は緑がいっぱい、穏やかな風景であったが、ここも壁等のひび割れや、家の損傷はあったようだ。

一迫山王史跡公園のあやめ園で祭が行われ、みちのくの芸能文化財に指定されている。古典的身の丈の倍くらいのササラを二本背負い、ササラの揺れてと勇壮な踊りが魅力的だ。

六つの地域から参加していた。その中でも震災被害が大きかった南三陸町から来た鹿踊りの衣装は震災で全部流された、しかし皆の努力で今回の祭りに衣装を新しく作り、参加することが出来た。この団体は夏、シカゴで踊るとアナウンスしていた。私の鹿踊りの作品も外人に人気がある。

伊達正宗公がこの踊りを愛好されて、毎年青葉城にきて踊るようにいわれ、伊達一門の九翟の星の紋が衣装に染められている。格式の高い祭りだ。祭りは東北人の礎になっているのかもしれない、東北人の強さを感じた。